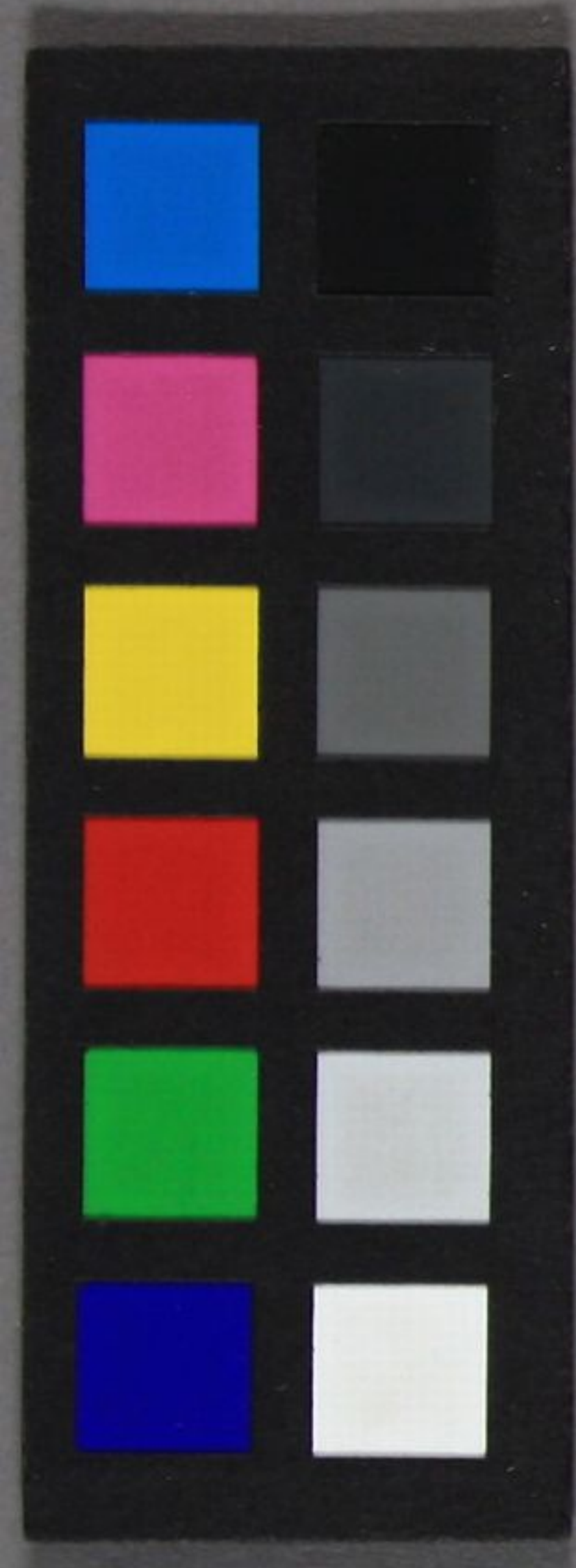


小 曲 詩 集

胸 よ り
胸 に



交 蘭 社

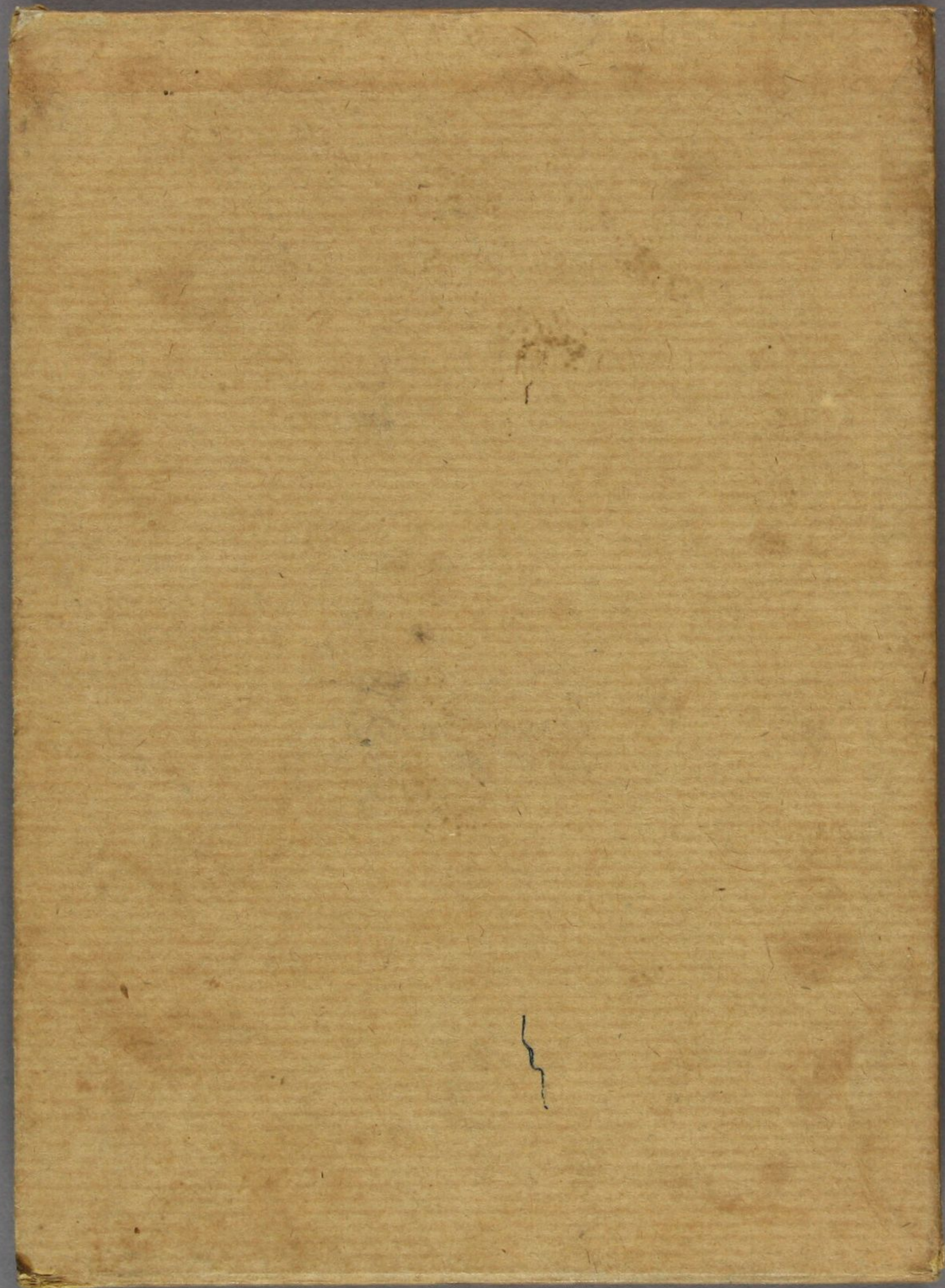


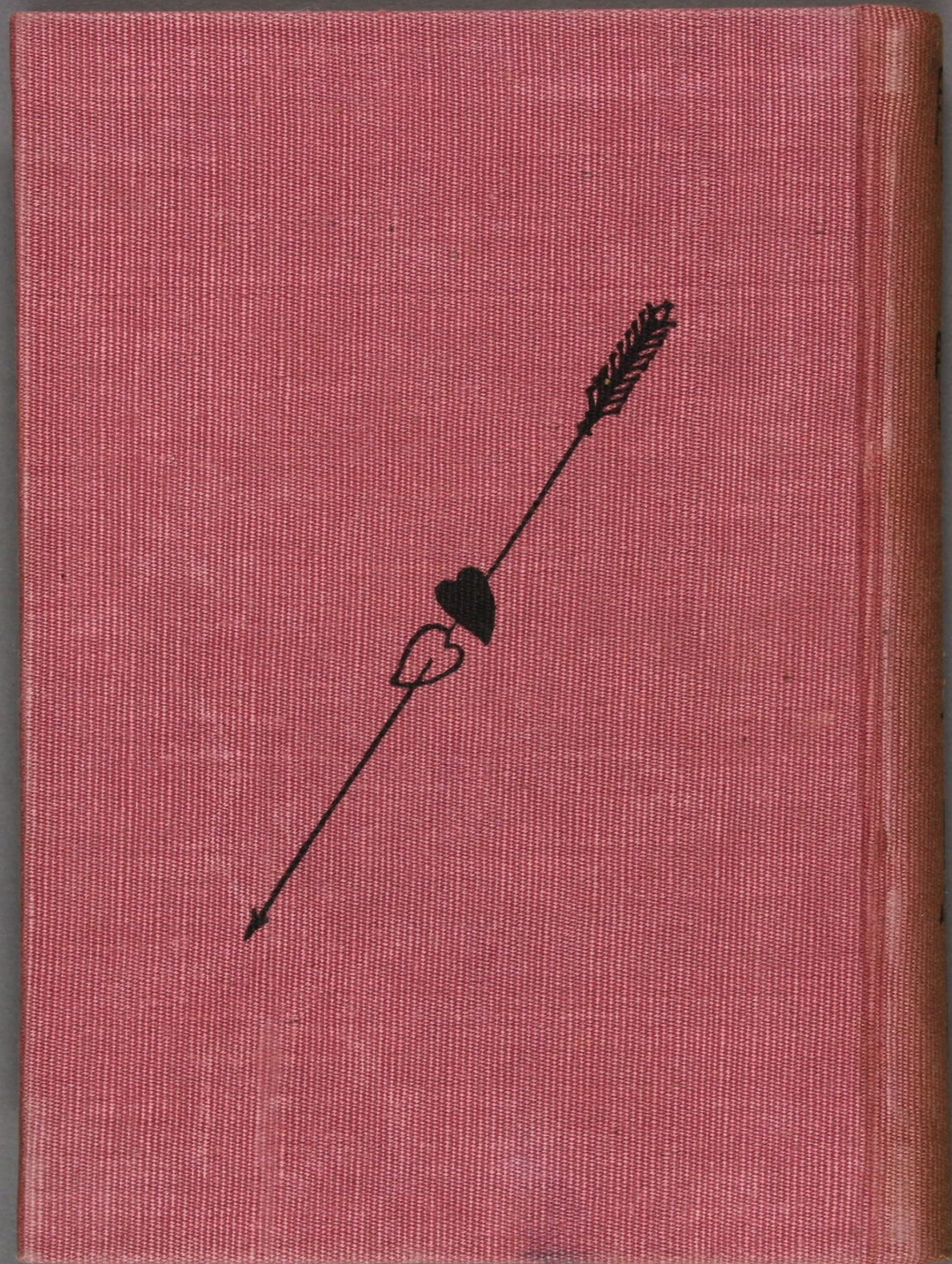
中曲
詩集

胸より胸に

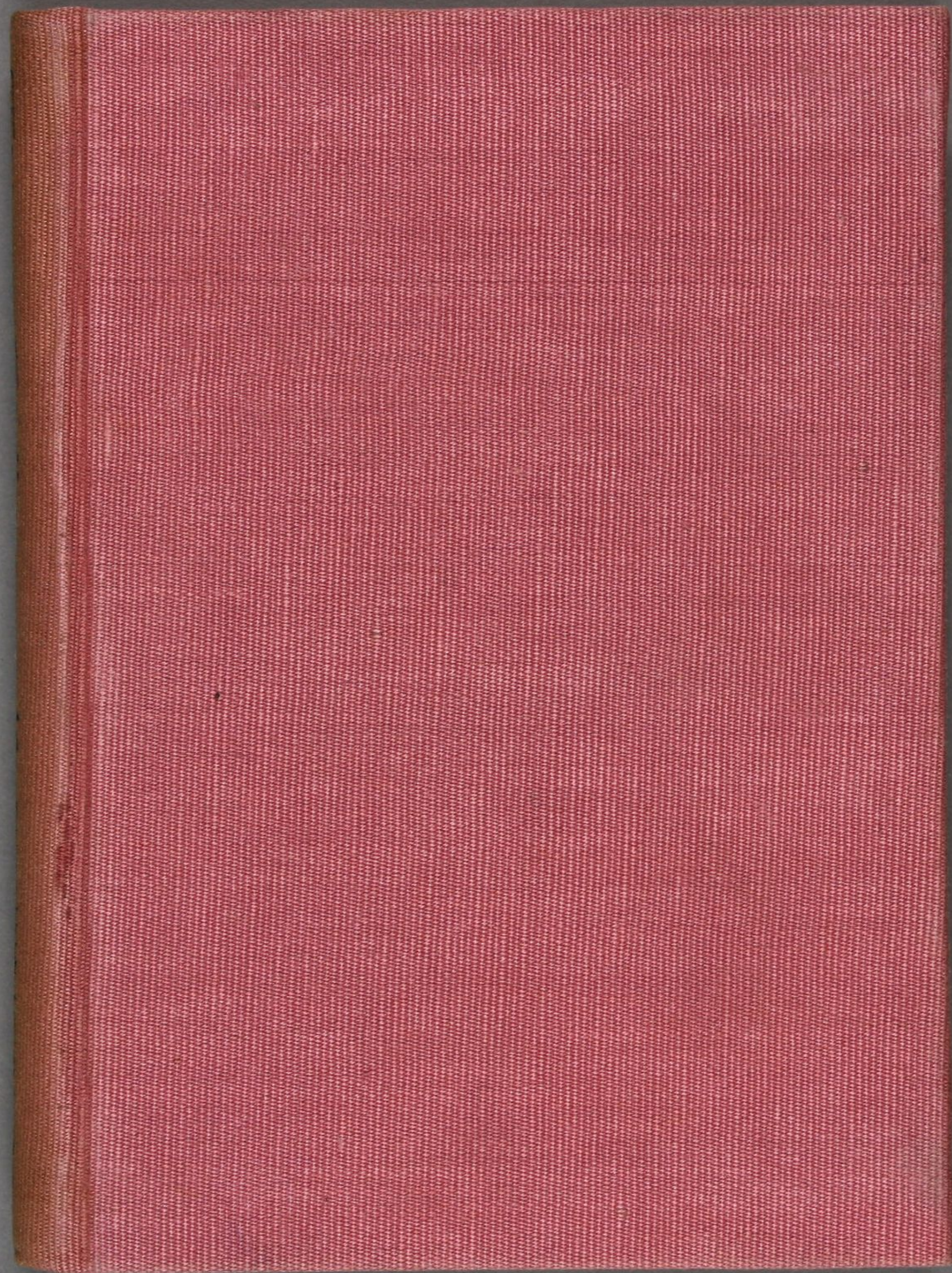


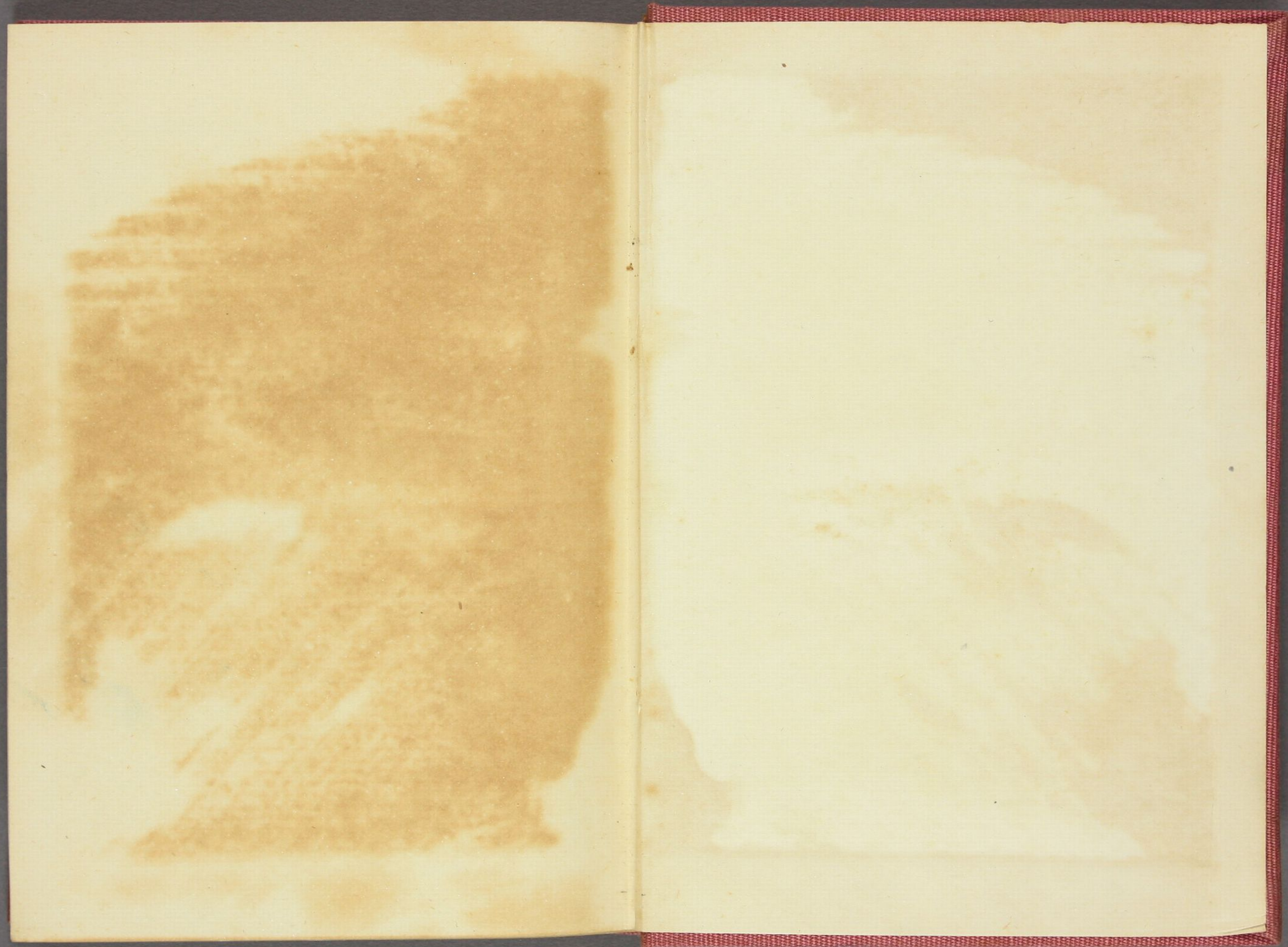
下田惟直著





胸より胸に
下田鑑十郎





小 曲 詩 集

胸 よ り 胸 に



交 蘭 社

序

私は南の方の小さい島に生れた。

そこには、くづれかゝつた古い城跡や、廢れた士族屋敷の石垣がさびしさうな姿をして残つてゐた。

それらは、いちはやく私の胸にほろびゆくものゝ哀れさを感じしめた。八つするとき、私ははじめて海を越えて、遠い旅に出た。その旅によつて、私は哀愁の笛の音をきいた。

そして、そのひびきにつれて踊る孤獨の影法師を見た。

十二の秋、母を失つた。それから私の心は暗くなつた。私の感情はだんだんとすすんで行つた。

でもやがて私は一つの慰めを見出した。

それは『詩』である。

そして、十五六の頃から、一生のうちいつかは綺麗な詩集を出版してみたいといふ、ひとつのあこがれをもつやうになつた。

その小ひさいのぞみがかなへられて、こんどこの小曲集を出すやうになつたことは、どんなにうれしいことかわからない。

私の胸は、たゞもうとめどなく躍つてゐるのである。

それはふたゝび亡き母の暖いふところに抱かれたかのやうなよるこ
びを感じながら……………

一九二三年四月

白木蓮咲く家にて

著者

小曲詩集

胸より胸に

装幀挿畫

落

谷

虹

兒

目次

草色の小鳥

草色の小鳥……………	(三)
踊り子の悲しみ……………	(六)
象牙の函……………	(八)
フリヂヤ……………	(二〇)
おぼろ月……………	(三三)

小鳥の唄……………(一)
ベコニヤ……………(一六)
水……………(一八)
瞳の窓……………(二〇)
涙……………(二三)
露臺のつばき……………(二五)
流れゆく花……………(二七)
瑠璃色の泉……………(三〇)
幻の君へ……………(三一)
雪もよほ……………(三五)

朶……………(三七)
紅梅尼……………(三九)
月あかり……………(四一)

少女人魚

少女人魚……………(四三)
郷愁……………(四七)
小石の塔……………(四九)
ミニヨンの唄……………(五三)
紅蘭の花……………(五四)
五月の夜の思ひ出……………(五六)
紫の煙……………(五九)

お七の唄……………(六一)
酒色の月……………(六四)
異國の酒場……………(六六)
青い海……………(六八)
島の唄……………(六九)

波の音

波の音……………(七五)
運だめし……………(七七)
扉の前……………(八〇)
心のほくろ……………(八三)
愛の使者……………(八五)
夢……………(八七)
うしろ姿……………(八九)
椅子……………(九一)

夕がすみ……………(九三)
銀の函……………(九六)
夕靄……………(九九)
銀の籠……………(一〇二)
さくら貝……………(一〇四)
人形つくり……………(一〇六)
いきのおと……………(一〇九)
鐘が鳴る……………(一一〇)

春はゆく

春はゆく……………(一五)
かなしみ……………(一七)
少女の日のため……………(二〇)
黒い瞳……………(二三)
わかれたゆゑに……………(二五)
紅い椿の咲く頃……………(二八)
朱い船……………(三〇)

涙の花びら……………(三三)
過ぎゆく風……………(三六)
へんぺん草……………(四〇)

かげらふ

かげらふ……………(一四七)
未練……………(一四八)
春の雨……………(一四八)
小鳥……………(一五〇)
遠鳴り……………(一五二)
ひぐらし……………(一五二)
くすり……………(一五三)
月見草……………(一五四)

足跡……………(一五五)
海鳥の歌……………(一五六)
叔母の死……………(一五七)
カンナの花……………(一五六)
笛……………(一五九)
叔母……………(一六〇)
さしやき……………(一六一)
紅色の花……………(一六二)
彼岸ざくら……………(一六六)
君ゆゑ……………(一六四)

わかれ……………(一六三)

秋の日……………(一六六)

月の出……………(一六七)

霞……………(一六八)

旅愁の涙……………(一九)

コスモスの花……………(一〇)

雪の大路……………(一七二)

玉章……………(一七二)

謎……………(一七三)

瓦斯の灯……………(一七四)

秋の夜半……………(一七五)

青い月……………(一七六)

悲しき夢……………(一七七)

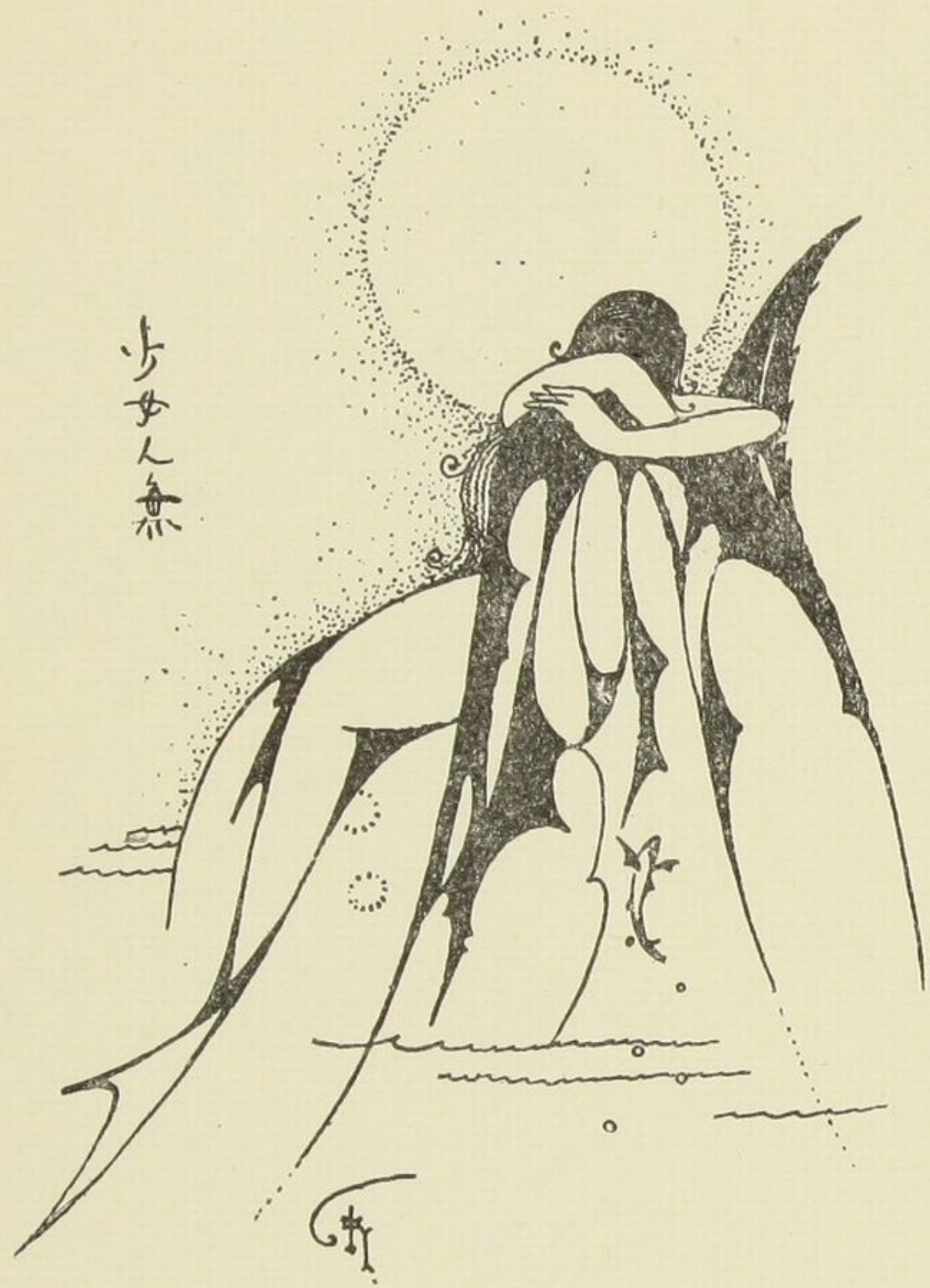
十七の頃……………(一七八)

若草……………(一七九)

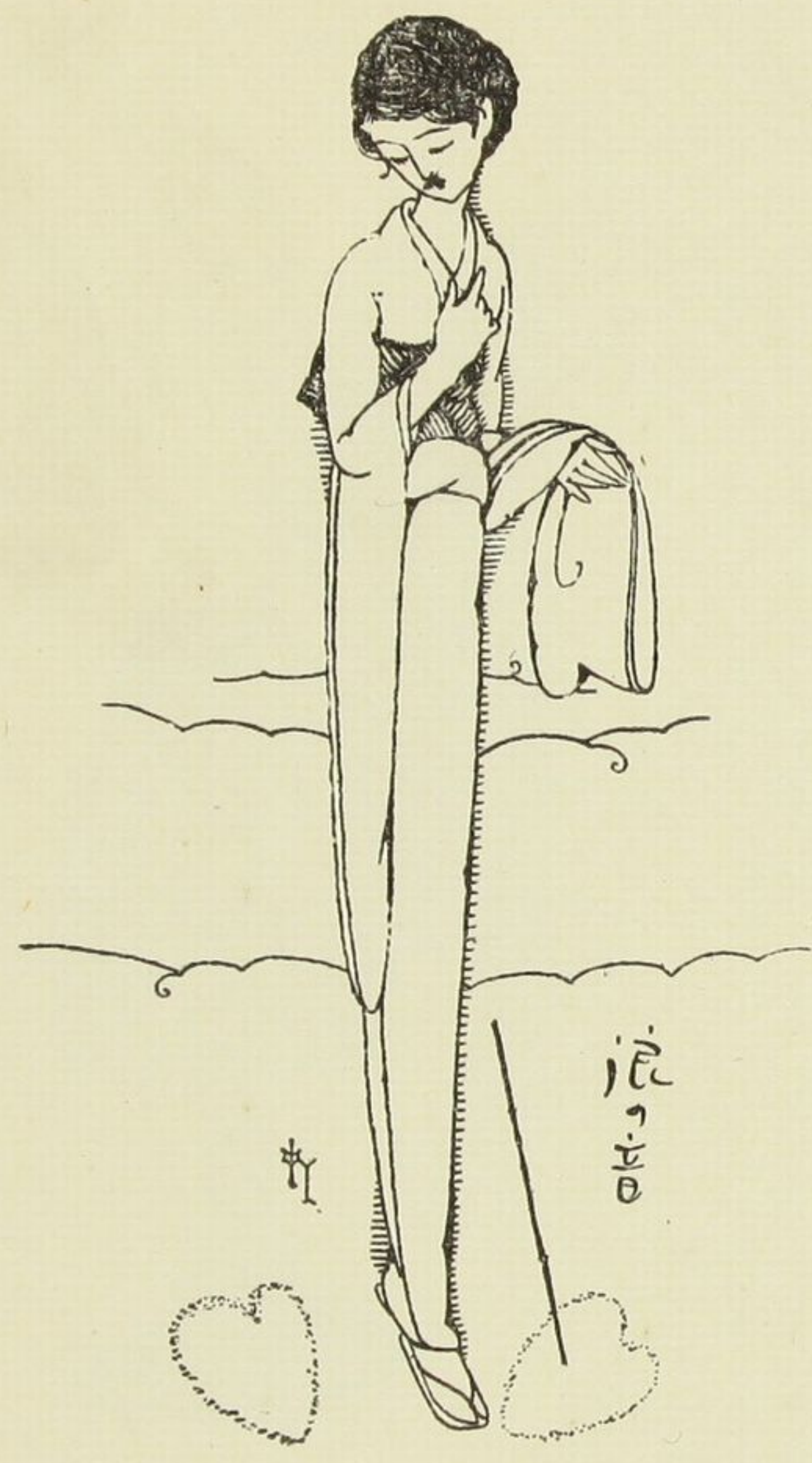
棕櫚……………(一八〇)

春の潮……………(一八一)

星……………(一八二)

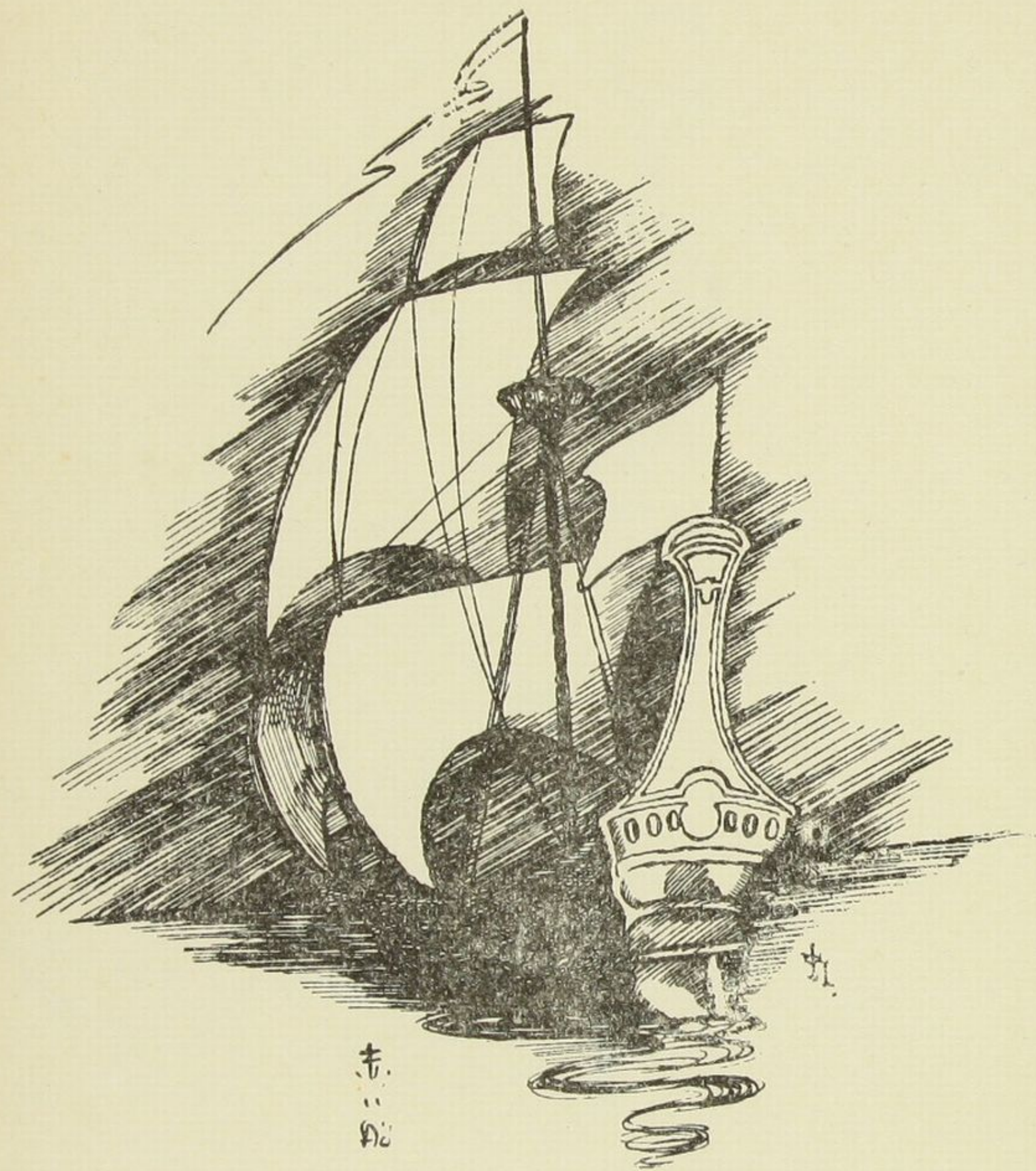


少女人魚





渙の月光



舟
二
船



踊りたる悲しサ。

Ⅺ

草色の小鳥

草色の小鳥

草色くさいろの

可愛かあいい小鳥こどりを

飼かつたなら

あたしの胸むねのさみしさが

なぐさむものではあるまいか

草色くさいろの

小鳥がうたう

南國の夢の小唄を

きいたなら

あたしの胸のかなしみが

うすらぐものではあるまいか

.....

君にわかれた、その日から

たそがれどきの窓に出て

こゝろほのかに

おもふこと——

踊り子の悲しみ

タンポリン

やぶるゝばかり

ならせども

うれひはさらに

つのりくる

ものくるほしき

春の夜の

舞臺のうへの

踊り子の

この悲しみを

誰か知る

フットライトに

照らされて

かくす涙を

誰か知る

象牙の函

象牙の函は
ないかしら

飾りは眞珠

紅珊瑚

琥珀の模様

黄金の釘

そして紅玉の
鍵つけて、

うら若い日の

はなやかな

夢をしまつて

おくための

象牙の函は
ないかしら

フリヂヤ

いろいろな草花くさはなを投げ入れた
机つくえの上の花くわびん瓶びんのなかで

たゞひとつ

あなたにいたゞいた

白しろいフリヂヤのちひ小さい花はなが

私わたしの瞳みまにつよくつよくうつります

ゆるし知らず、私わたしの心こころはひかれます

あなたのすがたを見るやうな

白しろいさびしいフリヂヤに……………。

おぼろ月

あたしの胸の
悲しみを

うつしたやうな

おぼろ月。

ものなやましい

春の夜は

月さへ

むせび泣くものを

ましてや

遠く、――

わかれして

歎かぬ宵がありませんか。

小鳥の唄

あなたのたよりが
けふ來ることを
しらせにきたのぢやありますまいか

南のお庭園の椿の枝で
可愛い小鳥が啼いてます

うれしいたよりが
けふ來ることを
祝ひにきたのぢやありますまいか

可愛い小鳥が聲ほがらかに
朝の日ざしで啼いてます

ベコニヤ

ほろ、ほろ……と

紅べにベコニヤの

花はらが散る……

初なつ夏のゆふべの

露バルコン臺に……

紅べにベコニヤの

花はなが散る……

もの戀こひそめし

少せうめいご女子の

涙なみだのほどに

ほろ、ほろ……と

水

水みづよ

いづこに

ながれゆく

春はるの川かは瀬せに

なげきつゝ

水みづよ

いづこに

ながれゆく

わがおもかげを

やどしつゝ

水みづよ

いづこに

ながれゆく

瞳の窓

その瞳ひこみの窓まどには
いつも涙なみだのカーテンが
かゝつてゐた。

その瞳ひこみの窓まどからは
いつも白びやくりよくしよく緑色の
尼寺あまでらの尖塔せんたうが見えてゐた。

いまもなほ
さみしいもの思おもひのをりをりに
こゝろの鏡かえりにうつる
あの、瞳ひこみの窓まどよ……

けれども
その瞳ひこみの窓まどは
永久えいさうにとざゝれた。

涙

森の娘——ラウテンデライン

水の精——ニツケルマン

森の娘

泉のおぢさん

これはなアに

あたしの瞳から

流れ出た

熱いしづくよ

これはなアに

水の精

おゝ、おゝそれは寶石ぢや
人間の——

ありとあらゆるよろこびと

ありとあらゆるかなしみを

みんな含んだ寶石ぢや

森の娘

泉のおぢさん、では

この寶石はなんといふ名なの

水の精　それが「涙」^{なみだ}といふものぢや

森の娘　あゝ、それではあたし

たうとう泣^ないぢやつたのね

(歌劇沈鐘を觀て)

露臺のつばき

バルコンの

小鉢^{こはち}のつばき

しほらしや

都^{みやこ}の塵^{ちり}を

身^みにあびて

姿^{すがた}はいとど

やせたれど

かたきつぼみの

みつふたつ

春ましがほに

ふくらめり

流れゆく花

誰がなげすてた

花ぢややら

紅きコスモス

ちよろちよると

野末の川を

ながれゆく

足をとどめて
しみじみと
見送るほどに
ほだされて
流るゝ花の
いたいけさ

昔のむかしのそのむかし
晴れぬ濡れ衣
身にまとひ

遠くの島に
ながされし
お姫様にも
似たるかな

瑠璃色の泉

秋は、もうすでに逝つてしまつたのに

樹といふ樹は

ことごとく落葉し、

草といふ草は

すべてセピヤ色にうら枯れてしまつたのに

春の頃から涌きはじめた

あたしの胸の

瑠璃色の泉は、

あゝ、いつまで

この悲哀の色をたゞへて

ゐることぞせう

今年も、もう暮れやうとするのに……

幻の君へ

——少女のうたへる——

誰たれに出たしませう

この手紙てがみ。

さみしきまゝに

ペンとりて、

セビヤインクで

こまごまと

胸むねのおもひを

書かいたれど

ひとりほつちの

少女をじめゆゑ

出だすべき友ともも

ありませぬ

でも、捨すてがたい

この手紙てがみ

せめては、

こころの

まはらし
幻の君へ——と

書いて置ませう。

雪もよほ

わが胸の

なげ
歎きの音か

しんない
新内の

よ
夜を流しゆく

さみせん
三味線よ

ぎんざ
銀座通りの

裏路次に
すゝり泣く音の
いぢらしさ

空をあふげば
雪もよほ
星さへ見えぬ
暗さかな

葉

これは、
記念の葉です。

水色はあなたのこゝろ
淡紅色はあたしのこゝろ

二つのリボンの結び目は

二人ふたりのこゝろの愛あいのしるし

リボンの房ふさの長ながいのは
永久とこにかはらぬしるしです。

紅梅尼

さくらの花はなのほの白しろい

春はるのゆふべにきこゆるは

あれはいづこの鐘かねの音おと

あれは尼寺あまでら善光寺ぜんくわうじ
入相いりあひつぐる鐘かねの聲こゑ

諸行無常の音たてよ
入相の鐘つくは誰れ
寂滅爲樂のひゞきもて
ゆふぐれの鐘うつは誰れ

鏡をつくのは

紅梅尼

今年十五の尼僧少女

月あかり

あまりにも

かなしみ深き

きみがふみ

灯のあかるさは
たへがたし

少女人魚

せめては、讀まん
月あかり
涙なみだにたる
ひかりもて

少女人魚

濱はまの漁夫りふしのいふことにや

島しまの岬みさきの岩陰いはかげに

少女人魚せうぢよにんぎよがゐるといふ

少女人魚せうぢよにんぎよはなにゆるか

波なみのしづかな月つきの夜よは

ひとりさびしい岩陰いはかげで

聲さへたてゝ泣くといふ

人魚の泣く音はギタールか
それともセロか、ヴァイオリンか
切れてせつないキーの音か

あふげばけふは十五夜の
今宵は月もまんまるい
島の岬の岩陰で
人魚はひとり泣くである

郷愁

南の國は
夢の國
わがふるさとよ
繪の國よ

乙女椿の
花かげに

小鳥のうたう
詩の國よ

あゝ紺青の
海越えて
つばめのごとく
かへらまし

小石の塔

——祈りませうよ
ふたり
二人の幸福を

——祈りませうよ
えいぞん
永遠の愛を

かの夏の砂濱に

小石を塔のやうにつみあげて

あなたとあたしは

瞳をかどやかしながら

祈りましたつけ、ね

二人の幸福を……

永遠の愛を……

あゝけれども

あの小石の塔が幸福さうに

あたりの水溜りに

その小さい影をうつしたのも

ほんの束の間でありました

いつしかに

大きな波のために洗ひ去られた

はかない小石の塔でありました。

・ ミニヨンの唄

暮^くれなやむ

若^{わか}葉^はかくれの

丘^かの上^へに

うたうはたれぞ

ミニヨンの

唄^{うた}のしらべも

しめやかに

うたうはたれぞ

シトロンの

花^{はな}咲^さく國^{くに}に

あこがれて……………

紅蘭の花

紅蘭の花咲き出でぬ。

とりとめて

おもへる人はあらねども

わりなく

泪わき出づる。

フェルト草履に

身をのせて

そどろにあゆむ

庭さきに、

紅蘭の花咲き出でぬ。

五月の夜の思ひ出

—少女のうたへる—

ちようど

その夜も

このやうな

五月の暗の

晩でした

庭園から匂ふ

うす甘い

花の香りが

ゆるやかに

二人をつゝんで

をりました

あの夜あるとき

露臺で

ふたりが

かたく手をとつて

愛のちかひを
たてたとき
山ほととぎすの
啼いたのを
あなたはおぼえて
ゐらしつて——

紫の煙

南の國の

こひしさよ

すみれ模様の
灰皿に
たばこの煙が
たちのぼる

南の國の
こひしさよ

金口たばこの
残り香が
むらさき色に
たちのぼる

お七の唄

結ひ綿ゆふて
臙つけて
鹿の子しぼりを
身にまとひ
ながひ振袖
猫ぢやらし
木履はくのを

たのしみに

『お七の唄』を

うたひつゝ

みそつ齒出して

愛らしく

笑ふ、十二の娘なりしが

お七姿も

見ぬうちに

永いわかれと
なりしかな

*『お七の唄』は、古いかぞへ唄で、忘れがたい印象と

して、私の頭に次の一章が残つてゐます。

「三つとせ、見たい逢ひたい吉さんへも一度わが家に火をつけて、逢ひたいわいな」

酒色の月

その窓のうち

ほのかなる風にゆらめく

水色カーテンのかげに

應への小唄うたう

をとめごはなきや

酒色の月は

いま、鈴懸の梢をはなれて

小夜曲うたひつゝ

しのびよる若者のごとく

丘の上なる洋館の小窓に

微笑のひかりを投げかけたるに……

異國の酒場

キユラソウの瓶は

さみしかろ

遠い異國の

酒場にきて

鏡のついた

棚の上

ましてや

春のくれがたに

つかひ古した

レコードの

マルセイーズの唄

きくときは

青い海

うつくしき少女
沈みしといふ
この海の青さかな

島の唄

椿の林のあいだから
唄がきこえる
明るいけれども哀調を帯びた唄聲が
—— ひかりのどけき
春の日に
よしや吉野の花よりも
お手をひかれてよかるぞえ——

眼に痛いエメラルドの空の下には
油濃い紺青の海原が
はてもなくつゞいてゐる

唄がきこえる
椿の林のあいだから
畑仕事のひまを盗んでうたう
若い娘の唄聲が……

海ぎはから峙つて
幾うねもつゞく
赤土の段々畑よ

私^{わたし}のからだは
陽炎^{かげらふ}の中で
いまにも燃えてしまひさうだ……

波
の
音

波の音

君きみ なわすれそ

大洗おほあらひ

東の海ひがしうみの

大洗おほあらひ

はてなくつどく

砂濱すなはまに

さらさらよせる
波の音を

その音よりも

永かれと

かたく誓ひし

言の葉を

君なわすれそ

運だめし

トランプを

幾たび切つたことせう

あなたのおいでを

待ちかねて

クロンダイクの

運だめし

幾たび切つても
出来ぬのは
もしもあなたが
来られない
不吉なしるしぢや
ないでせうか

時計は四時をうつたのに
あなたの姿は

見えもせず
いまにも雨の降りさうな
暗い天気になりました。

扉の前

これほどに

血の出るほどに

たゞいても

ひやゝかな

あなたの胸の

鐵の扉が

あかぬなら

せめては、友よ

私のこゝろの月影を

あなたの胸の

鐵の扉の

鍵の穴からでも

照らしませうものを……。

心のほくら

わすれがたい

あのほくら

彼女の耳の下かのぢよのみ、したの

謎なぞのやうなほくら

花はなが散ちつて

萌もえそめた若葉わかばの木立こだちを

うなだれかちな夕靄ゆふもぢやが

しつとりとつゝんでゐた

あのゆふぐれ

彼女かのぢよが籐椅子たういすにもたれたまゝ

身みうごきもしなかつた

あのゆふぐれ

あたしのこゝろに焼やきつけられた

ひとつのほくら

謎なぞのやうなほくら

あゝ、いまはもう消けしても去さらぬ

あたしのこゝろのほくら

愛の使者

枯かれたとて、

しぼんだからとて

この花はなが、

あなたにもらつた

この花はなが、

どうして、どうして

塵ちりだめに

捨てられませう

この薔薇は

あなたのこゝろを

身にこめて

愛の使ひに

来たものを……。

夢

——少女のうたへる——

夢をみましたの、

きまりがわるくて

とてもおはなしできないゆめ、

うれしいゆめ、

ね、あなたおわかりになるでせう

あなたと……

そして

あたしと……

二人のゆめ……

うしろ姿

うちにかへれば

母かさんに

まだあまたれる

可愛かさを

こころのすみに

もちながら

ものゝうれひを
知りそめて
目にたつほどに
やつれたる
わが戀人の
いたいけな
うしろ姿を
見守りぬ

椅子

椅子にすはつて
しみじみと
君を待つ間の
たよりなさ
待てどくらせど
かへり來ぬ

君のいとしさ
にくらしさ

待ちあぐねたる
ぢれつたさ
椅子を離れつ
抱きよせつ。

夕がすみ

田端の驛の
夕がすみ
あなたと二人
お逢ひした
あの日のやうな
夕がすみ

けれども

あなたは

見えませぬ

電車でんしゃはしげく

来るけれど

あなたの姿すがたは

見えませぬ

柵さきにもたれて

たゞひとり

あの日ひをしのぶ

わが身みをば

ほのかにつゝむ

夕ゆふかすみ

銀の函

あたしの胸の
銀の函

誰にも見せない
銀の函

誰にも開かない

銀の函

でもたゞひとつ
鍵がある

この函あける
鍵がある

鍵はあなたの
胸の奥

愛の御殿の
庫の中

夕
靄

白い夕靄が
しつとりと
上野の森を
つゝんでゐた。

あたしは
あふれるやうな

胸のおもひを語りながら
友の返事をきかうと
うながした

けれども友はうなだれたまゝ
かたく結んだ唇を
ひらかうとはしなかつた。

あたりはまるで海底のやうに
白い夕靄は

ますます深く
私たちをつゝんでしまつた。

銀の籠

「愛あいの小鳥こどりは
どこへ行いた
銀ぎんの格子ぐしの
籠かごぬけて
紅あかい小鳥こどりは
どこへ行いた」

小鳥こどりの逃にげた
空籠からかごは
やつれほゞけて
青白あをしろい
ゆふべの風かぜに
ゆれながら
小鳥こどりたづねて
泣ないてゐる。

さくら貝

さくら貝かひ
さくら貝かひ

東ひがしの海うみの砂濱すなはまで
ふたりでひろつた
さくら貝かひ

なにを夢ゆめみる
さくら貝かひ

小雨こさめふる夜よに
しよんぼりと
小函こはこの中なかの
さくら貝かひ

人形つくり

われはさびしき
幻まほろしの人形じんぎやうつくり

日ひごと夜よごとに

さまさまの

君きみが姿すがたをつくるかな

胸むねもせましとつくるかな

されど、されど

あるときは

憂うれひひのすがた

あるときは

悲かなしみの

極きはみのすがた

あゝ、かくて

君きみがすがたの

よろこびを
わがつくる日は
いつならむ

.....

窓まどをもれ入いる

月つきかげの

水みづよりしろき

今宵こよひかな——

いきのおと

きみは、さみしきさがゆゑに
ものたまはぬひとゆゑに
われはこゝろをうばはれて
かそけいきいきのおとにさへ
きみのことばのこもるか
しづかにみゝをかたむけぬ

鐘が鳴る

鐘が鳴る

鐘が鳴る

鐘が鳴る

いま別れてきたばかりの
上野の丘から

あゝ、
また鐘が鳴る……

春はゆく

春はゆく

春はゆく

風なき野邊に

たんぽこの

花は散りつゝ

春はゆく

いとしき人の

瞳ひとみの底そこに

解ときがたき

謎なぞをのこ残のこして……。

かなしみ

かなしいときに

ひとつづゝ

つくつておいた

あねさまを

そつと出だしてみましたら

函はこいつぱいもありました。

うれしいときに

ひとつづつ

つくつておいた

お手玉は

たつた六つしかありません。

かうして暮れてゆくことが

少女子の日もたよりなく

かなしみのみたされて……。

* あれさま—紙でつくつたお人形さんのこと。

少女の日のため

—十六の少女のうたへる—

クローバーの模様もやうの着物きものを
きませうよ

帯おびもあたしのだいすきな
薔薇ばらのちらしを
しめませうよ

うら若い日ひの

暮くれやすく

今年ことしはもはや

十六の

夏なつなかばになつたのに

ゆけばふたゝびかへり來こぬ
をとめごの日ひのおもひでに
すきな着物きものに帯おびしめて
若わかさのかぎりはれやかな

笑みをたゝえてみませうよ

黒い瞳

名もしらず

ところもしらず

時もしらず

たゞあたしの胸の

手帖のページに

しるされてゐるのは

黒いふたつの
腫ばかり

わかれたゆゑに

もう泣きますまい

なげくことも

やめませう

散るゆゑに

花はうつくし

短いゆゑに

少女をじめの日は

はなやかです、

死ぬしゆゑに

人生ひなのよはなつかしい

あゝ、そして

わかれたゆゑに

二人ふたりの愛あいは

いつまでもいつまでも

貴たうたいのです。

もう泣なきますまい

なげくことも

やめませう、

そしてたゞひたすらに

抱いだきしめてをりませう、

たのしかつた

二人ふたりの愛あいの思おもひ出でを……。

紅い椿の咲く頃

紅あかいつばきの咲さく頃ころは

胸むねの小壺こづぼにあまるほど

ものこひしさの泉みづが湧わく

愛あいのしらべをうたひつゝ

甘あまい小壺こづぼの泉みづのみに

飛とびくる小鳥こどりはないかしら

紅あかいつばき咲さくころの

ものわびしさにたへかねる

さみしいあたしのものおもひ

朱い船

— 朱いお船は

どこ行きやる

琥珀の小鳥

黄金の籠

まださめやらぬ

夢のせて

朱いお船は

どこ行きやる

— わかれてゆくのは

かなしいが

『時』の王子の

ゆくまゝに

思ひ出の國

夢の國

よべどふたゝび

かへり來ぬ

國くににゆかねば
なりませぬ

涙の花びら

なつかしや

ふみをひらけば

ほろほると

こぼれて落ちぬ

藤ふじの花はな

したはしさにぞ

手にのせて
きみがなさを
しのびつゝ
ふたゝびみたび
くちつけぬ

おもへば遠き
筑紫路は
いま山藤の
眞盛りか

かのせゝらぎの
ほとりにて
白魚よりも
なほしろき
小指に藤を
つみとりし
きみがすがたも
うかぶかな

あゝふるさとの

わが友よ

ふみに托せし

山藤の

この花びらの

むらさきは

きみがなみだか

こひしやな

過ぎゆく風

淡紅色絹のカーテンを

そよそよなぶる

春かぜの

それにも似たる

この頃の

はかなき

君がうすなさけ

すぎゆく風を
よびとめて
縫がらんすべは
なけれども

あまりつれなき
君ゆゑに
なげきの涙
とめあへず

恨みに瘦せし
わが身かな

ぺんぺん草

あたしは

はかない

野邊のべの草くさ

のぞみも

ねがひも

ありません

雨あめが降ふらうと
踏ふまれやうと

のぞみも

ねがひも

ありません

われとわが身みの
ほろほろと

風かぜに鳴なる音おとを
きゝながら

わびしく暮くらす
あたしゆゑ

のぞみも
ねがひも
ありません

廢すたれた園そのの
かたすみで
ぺんぺん草ぐさの
ひとりごと……

か
げ
ら
ふ

かげらふ

草くさに寝ねて

君きみをおもはん

草くさにねて

君きみをおもはん

陽かげらふ炎ひもゆる

未練

未練みれんなく

思おもひ切きらん——と

せしものを

霰みぞれ降り、ふり

こゝろたゆたふ

春の雨

かゝる日ひに

まだうら若わかく

死しにゆきし

少女をこめありけむ

春はるの雨あめふる

小鳥

ゆふぐれの

ものしづかなる

枝えだにきて

聲こゑしめやかに

鳴なく小鳥こどりかも

遠鳴り

さきの代よの

人ひともー

未み來らいの世よの人ひとも

この音おときくらむ

波なみの遠とほ鳴り

ひぐらし

蛸たこよ

鳴なきそ

さびしきゆふまぐれ

永ながきやまひの

わが庭にはにきて

くすり

癒いえなむ日ひの

あてなきやまひ

飲のみなれし

薬くすりの味あじも

さびしき日ひかな

月見草

燈臺とうだいの

白しろく立たちたる

砂丘すなやまに

154

月見草つきみさうつみて

くちづけにけり

足跡

砂濱すなはまを

あゆみ疲つかれし

身みをとめて

わが足跡あしあとを

ふりかへり見る

155

海鳥の歌

海鳥の

うたうは

なにの悲しみぞ

はてしもしらぬ

海にむかひて

叔母の死

いろいろの

おもひも長き

黒髪を

亂し、まゝに

叔母の逝きける

カンナの花

わが叔母は
つひにかへらず
なりにけり

カンナの花に
夕日ゆふひてりつゝ

笛

草や木が
耳みみそばだてゝ
ひつそりと

わが吹く笛を
きゝ入るごとし

叔母

生きてあらば

涙ながして

この笛の

ひびきを

叔母は

きゝしならんに……」

おゝやあ

なにやらむ

われにさゝやく

聲きこゆ

春のゆふべの

うす暗のなか

紅色の花

うつくしき

少女をとらのなさけ

したよりて

この花はな紅べにと

咲さき出いでしものか

彼岸ざくら

しらじらと

彼岸ひがんざくらの

花はな咲さかば……

うら若わかき身みを

いかにすべけむ

君ゆる

一人ひとりならば

若く、うたうて

あるべきに――

君ゆる

春、も涙なみだにひたる

わかれ

わかれなば

いつ逢あふことぞ――

この月つきの

悲かなしき色いろを

わすれ給たまふな

秋の日

秋あきの日や

誰たれが手てすさびの

笛ふえならむ

166

青玉せいぎよくの空そらに

鳴なりわたるかな

月の出

そのうちに

笛ふえふく人の

あれよかし

167

洋館やうくわんの窓まどに

月つきさしにけり

霰

人知れず

大地の上に

降りそゞぎ

人知れずこそ

霰は消ゆる

旅愁の涙

幌馬車よ

しばしとどまれ

すゞろなる

旅愁の涙

涌きてやまねば

コスモスの花

海近き

赤土丘の

廢れたる屋敷の跡の

コスモスの花

雪の大路

たそがれの

雪の大路を

あゆみつゝ

故郷とほく

きつるわれかも

玉章

あたゝかく
胸のぬくみの
通ふまで

君が玉章を
抱きしめにき

謎

秋の夜の
空にまたゝく
星の數

かぞへつくさば
解けなん謎か

瓦斯の灯

眼をとぢて

わが越しかたの

さまさまの

姿をおもふ

瓦斯の灯のもと

秋の夜半

『はかなげに

泣く妹を

いたはれる』

夢——よりさめし

秋の夜半かな

青い月

氏神うじがなの祭まつりの夜よるの
人ひと混みまがの中なかより
あふぎし

青あをき月つきかけ

悲しき夢

うちあけて
語かたらば
夢ゆめの消きえぬべし

秘ひめんとすれば
涙なみだわりなし

十七の頃

ゆる知らず

植物園に泣きに來し

十七の日の

はるかなるかも

(植物園にて)

若草

若草や

そゞろあるきの

口笛に

吹きおぼえたる

セレネードかな

棕
櫚

薔薇いろに

朝日のぼれば

キラキラと

段々畑に

ひかる棕櫚の葉

春の潮

かもめ飛ぶ

春の潮に

すべりつゝ

島の港を

汽船は出でゆく

星

露臺バルコンに

きみがうたうを

しばらくは

星ほしの聲こゑかと

空そらをあふぎぬ

大正十二年五月十日印刷
大正十二年五月十五日發行

定價

金壹圓參拾錢

不許



複製

著作

下田惟直

發行者

飯尾謙藏

東京市神田區仲猿樂町十七番地

發行所

東京市神田區仲猿樂町十七番地

交蘭社

振替口座東京
四〇二七九番

印刷者

内田廣藏

東京市外戸塚町下戸塚二四〇番地

類書きべむ讀の嬢諸生學女

吉屋信子 先生新著	水谷まさ る先生著	西條八十 先生新著	野口雨情 先生著	落谷虹兒 先生著	生田春月 先生著	竹久夢二 先生著	藤森秀雄 先生著
憧れ知る頃	詩物語	新しい詩の作り方	十五夜お月さん	詩集銀の吹雪	小集春の序曲	詩集青い小徑	小集若き日影
送料金一圓四十錢	送料金一圓五十錢	送料金一圓八十錢	送料金一圓三十錢	送料金一圓十錢	送料金一圓十錢	送料金一圓十錢	送料金一圓十錢

發行所 東京神田區仲樂七十七番地 交蘭社

